名所物見の旅　其の伍拾　仙人温泉から阿曾原温泉へ

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

秘湯仙人温泉に名残を惜しみつつ小屋の親爺さんに別れを告げ、雲切新道を黒部峡谷へと下った。雲切新道は私にとって初めての道だ。阿曾原温泉小屋の主人らが新しく雲切谷の尾根に登山道を切り開らき、2007年度から使用されている。それ以前の仙人谷の登山道は、谷を埋めている雪渓の雪解け時に於ける崩壊で荒廃が激しく、整備作業が追いつかない状態であったという。池ノ平モリブデン鉱山の搬出道として大正時代に開かれた歴史ある仙人谷の道は、雲切新道開設を期に廃道になった。

黒部峡谷の秘境に突如現れた仙人ダム。 高熱熱隧道掘削というまれにみる難工事の末、 昭和15年に竣工。 戦前戦後の劣悪な電力事情を向上させるのに貢献した。

仙人温泉から仙人谷源流の小さな橋を渡ると、仙人温泉の源泉が湯煙を上げている。もうすでに大正時代の仙人湯の湯小屋は、その痕跡すら見つけることは出来なかった。源泉からは南仙人山より派生した尾根へトラバース気味に登り、しばらくなだらかな尾根上を進んだ後、雲切新道は黒部川の奈落に向かって一気に下っていく。ほかに登山道を開く場所はなかったのかと不審に思うくらい、ジュラルミンの梯子とロープが連続する難路が続く。しかし周りを見渡しても、日本一の峡谷と謳われる黒部のこの付近の尾根はどれも急角度で黒部川まで落ち込み、道をつけることが出来るような尾根は見当たらない。難路ではあるがよく整備されていて、それほど危険は感じず、転げ落ちるように高度を下げていくので、黒部川が見る見る迫ってくる。最後は黒部峡谷の秘境に突如現れた仙人ダムに向かって、マンション五階分くらいをジュラ梯子で下って到着。

辿り着いた黒部川流域は何度か歩いた私にとっては懐かしの道。ここから下流へ向かうこと13ｋｍ、約6時間で黒部峡谷鉄道終点の欅平駅へ出る。上流へ向かうと黒部川の核心部“下の廊下”沿いの日電歩道を経て16.6ｋｍ、約8時間で黒部ダムまで歩くことが出来る。

仙人ダムと高熱隧道

仙人ダムは黒部川電力開発の目玉として戦前の昭和15年に完成。仙人ダムに集められた水は地下水路で下流の欅平にある黒部第三発電所（最大出力8万1,000ｋW）に運ばれる。現在は第三発電所の上流に新第三発電所（最大出力10万5,000kW）が併設されている。また仙人ダム対岸の牛首尾根末端の地下には第四発電所があり、黒部ダムから運ばれてきた水によって発電が行われ、最大出力33万5,000ｋWと日本第四位の発電能力を有している。

仙人ダムから今日の目的地阿曾原温泉へは、少しの間ダム施設内を通らなければならない。施設に入るドアには動物が入り込まないよう開放厳禁の注意書きがある。熊や猿が内部に這入りこんだら厄介なことになるからである。建物同士をつなぐアーケード部には金網が張られていて、なんだか我々人間が動物園の檻の中にいるような気分になる。

仙人ダムの余剰水は岩壁に掘られた吐水トンネルから黒部川へ勢いよく排水されている。

内部トンネルを進むとだんだん蒸し暑くなってきた。硫黄臭も充満していて息苦しい。トロッコ列車が来ないことを確認して、急ぎ足で通過した。この一帯は昔「高熱隧道」と呼ばれた一部である。大正から昭和にかけて黒部川電力開発のためのトロッコ軌道は延長されてきたが、昭和12年阿曾原から仙人谷区間の隧道を掘り進むうちに温泉が噴き出し、掘削作業は困難を極めることになる。黒部川から汲み上げた水を作業員に浴びせて掘削を続けるが岩盤温度は上昇し続け、翌13年には100℃を越え、岩盤に装填した発破用のダイナマイトが自然発火で暴発する。岩盤の高熱が伝わらないような工夫がいろいろ試されるが爆発事故はその後も続き、岩盤温度は最高で165℃を記録している。作業従事者はこの極限状態の中、精神に異常をきたす者が続出したという。黒部といえば昭和32年、黒部ダム建設時の扇沢からダム建設予定地までの後立山地下トンネルに於ける破砕帯突破工事ばかりが有名であるが、この「高熱隧道」をはじめ、次回紹介する岩壁に作られた資材運搬用の桟道からの転落事故、そして志合谷で起きた恐怖の出来事など、黒部には枚挙に遑がないほどのドラマがある。

仙人ダム内のトンネルは冷却用導水管が施設された現在でも、熱気と硫黄臭が充満している。

現在このトロッコ軌道は欅平から仙人ダム経由で黒部ダムまで通じている。硫黄が送電線を腐食させるため電化されておらず、燃料の引火爆発の危険もあるためジーゼル機関も使用出来ないので、蓄電池式牽引車による運行となっている。仙人ダムの一部を除き、地下トンネル内を走行するので冬季も運行が可能だが、関西電力関係者以外は乗車することは出来ない。

パパイヤ鈴木氏と阿曾原温泉に浸る

仙人ダム作業員の為の人見平宿舎から山道に入るといきなり急登となる。毎回ここに来るたびに、疲れもピークに達する一日の行程のフィナーレで、この登りをこなすのは肉体的にも精神的にも大変きついなぁと感じる。登りきってしばらく水平な道を行き仙人谷の旧道分岐を左に見て下れば、仙人ダムから約一時間で阿曾原温泉小屋に到着する。

阿曾原温泉小屋は7月中旬から10月末までの営業で、日電歩道を塞ぐ雪渓が消えて歩行可能になる9月上旬以降から雪に閉ざされる10月いっぱいがこの小屋の書入れ時となる。一年のうち二ヶ月弱しか歩くことが出来ない“下の廊下”目当てに多くの登山者が訪れ、黒部ダムから欅平までの間の唯一の宿泊施設である阿曾原温泉小屋は大変な賑わいを見せるのである。私が訪れた数日前の10月の連休中日が混雑のピークだったようで、80人ぐらい座れる食堂での夕食は5交替、寝具は布団一枚につき2.5人で就寝したという。本日は夕食二交替、布団一人一枚と楽なものであった。小屋の主は以前の方とは交代していて、新しいヒゲの主人は翌日の私の予定を聞き、携帯は繋がらないからと私の為に祖母谷（ばばだに）温泉に予約を入れてくれたり、繁忙期にもかかわらずとても親切であった。

温泉は小屋から5分ほど下ったところにあり、入浴は男女一時間ずつ交代となる。草の台地に湯船があり、近くの隧道からは湯煙が上がっている。この隧道の奥から湯は引かれていて、熱い湯と水が湯船に注がれ溢れている。あたりの山々は秋色が深まってきているが、私の経験では黒部ダムから“下の廊下”の紅葉のピークは10月20日前後なので、この周辺もあと一週間もすれば絶好の見頃を迎えるはずだ。

仙人池ヒュッテで一緒だったドクター氏らと温泉を楽しんでいると、ドカドカとテレビ取材の一行がやってきた。仙人温泉の親爺さんが言っていた通り、パパイヤ鈴木氏が秘湯を巡って祖母谷温泉、阿曾原温泉、仙人温泉と足を延ばす予定で、これから阿曾原温泉で入湯シーンを撮影するという。総勢10名近く、テレビカメラ二台体制の大掛かりな撮影だ。パパイヤ氏は以前のイメージより、ずっとスリムになったように感じる。湯に入っているのは中高年登山者ばかりのせいか、あまりパパイヤ氏に注意を払う人はいない。中には「あれは誰だい？」などと話しているのがおかしかった。

パパイヤ氏は祖母谷温泉から阿曾原までの道のりに、「いや～疲れました」と言っていたが、黒部の奥深い自然には感銘を受けている様子だった。翌日は仙人温泉まで登るわけだから、より困難が待っている。ベテランのプロ登山家二人がガイド役についているので不安はないだろうが、山慣れぬパパイヤ氏も機材を担ぎ上げるスタッフも大変であろう。（このときの様子は去る10月27日の地デジ７チャンネルなどテレビ東京系の番組で放映された）

小屋の夕食は大量のニンニクを炒めて香りを効かせた名物カレーライスとメンチカツとメニューは決まっていて、カレーは何杯でもお替り自由。その代わり制限時間が設けられ、大人数に対応している。私は一杯半おいしくいただいたが、周りには三～四杯平らげる猛者もたくさんいた。

夕食も済んでくつろぎのひと時、壁に寄りかかったまま大イビキをかいてるパパイヤ氏を見て、本日の彼の苦労が偲ばれるのであった。

小屋から5分ほど下ったところにある阿曾原温泉露天風呂。 本日はテレビカメラの取材も入り大賑わいであった。